

学際連携のための形態素解析を用いた思考可視化 ICT ツールの開発

○無所属 萱間隆
東京工業大学 矢野雅大
株式会社ドワンゴ 小泉亮
東京大学 高田正哉
大阪大学 田口了麻

1. 報告の目的と概要

本報告の目的は、異なる学問分野を連携させた研究を手助けする ICT ツールの開発にある。昨今、各々の専門分野が「タコツボ型」(丸山眞男)化したことへの反省を受けて学際性を標榜した多くの学部が新設される傾向にあるが、それらの研究は未だにそれを解決するに至っていない。これらの現状が物語っているのは、「タコツボ型」から共通の基盤を構築する「ササラ型」への転換には大きな問題が含まれている、ということである。その問題点は、大きく分けて二つある。第一に、専門細分化が進む現代において複数の学問領域に精通することは不可能に近いため、異分野間での相互理解が困難なこと。第二に、自分の分野をどの分野と連携させるのが有効かという問題を考えるには分野横断的な知識に精通していることが既に前提になっているということが、それぞれ挙げられる。そこで報告者たちは、これらの問題を克服するために、共同で新たな ICT ツール (Brain Peeper) の開発を、設計思想の設定から行うことを試みた。

2. 方法 (Brain Peeper の解説)

今回開発した ICT ツールである Brain Peeper の主な機能は、複数のユーザーが登録した単語の関係性を表示することである。まず、ユーザーは任意の関連する 2 つの単語のペアを登録していくか、思考を可視化したい人の書いた文章をこのツールを用いて解析する。すると、知識が多数の単語のリゾームとして Brain Peeper 上で再現されることになる。登録した知識およびリゾームは、他のユーザーが登録したものと組み合わせることができ、これにより自分の研究が異なる分野の研究とどのように繋がっているのか、もしくは繋がっていないのかを確認することができる。

3. 考察

Brain Peeper 上では、どの単語を組み合わせるとどのようなリゾームを作るかがユーザーに任されているため、異分野間の相互理解を必要としない。Brain Peeper においては複数人の思考が繋がっている部分がツールによって自動で計算されるため、異分野のなかで自分の分野に関係がある可能性が高い部分の学習に集中するのみで連携が可能となる。また、基本的操作は自分の知っている単語とその関係性を登録するか、もしくは文章を流し込むだけであるため、異分野のユーザーとの繋がりを登録の結果として表示する仕様となっている。それゆえ、分野横断的な知識を前提にする必要性がない。よって以上の点から、Brain Peeper を使うことは先に挙げた二つの問題の発展的解消に十分応用可能であると考えられる。

4. 結論と今後の展望

本報告では、Brain Peeper が従来とは違ったアプローチで学際的な研究を手助けする可能性を示唆した。今後は、本ツールを使ったユーザーからのフィードバックを通して、ICT ツールを用いた学際連携が工夫次第では現実的に可能であることを実証していきたい。

[文献] Gilles Deleuze, *Différence et répétition*, 1968, PUF. (=財津理訳, 『差異と反復』河出書房新社, 1992年) 他.